

幼馴染、再会

A0.K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

10年前に別れた3人の幼馴染

気づかず内に歯車は止まり、10年経った今、再び動き出す

錆び付いた歯車をもたらす3人の運命とは――。

目次

認めたくない思い、募る想い

1話	再会	1
2話	再会2	6
3話	再会3	10
4話	新しい仲間	15
5話	仕事と過去	19
6話	独り	23
7話	聞いてない!	27
8話	仲間たち	31
9話	その頃	36
10話	昔は……(w)	40
11話	嘘だろ!?	44

12話	あたしの為に争わないでっ (言ってみたかった)	48
13話	地獄とはまさにこの事	53
14話	試合開始前	58
15話	主将たちと、	62
16話	『私の』『あたしは』	66
17話	殺る気	70
18話	本格的に	74
19話	どうする	80
20話	壊れてく	85
21話	優しさ	89
22話	コミュ障とエスパー	93

23話	歪んでく	97
24話	後悔	102
25話	リセット	106
26話	国語は出来ない廊下走って泣	110
き虫毛虫	—	110
27話	運命	115
28話	親子	119
29話	作戦変更	123
30話	幸せ	127
31話	すべき事	131
32話	最強タッグ…!?	134

認めたくない思い、募る想い

1話 再会

10年前、あたし達は別れた

もう向こうは顔も忘れてるだろう、あたしだって多分分かんないけど、18歳になったある日…あたしの人生は360度変わった

「1周して何も変わってねーよ!!!」

「あれ?」

設定

月城碧・つきしろ あお・

黒髪ロング（ポニテ）

ツリ目

スタイル抜群（184・7cm）

性格は明るい（うるさい）

音駒高校に編入

（その内イメ画を載せようと思います！）

他にもオリキャラは出そうと思っておりますが

その時はちゃんと設定紹介するので！

10年前、俺たちは別れた

顔は忘れたことがない、忘れられるはずがない

そんなある日、俺の人生は180度変わった

「久しぶりに会ったと思ったら相変わらずかよ!!!」

黒尾鉄朗

原作と同じになるようにします！

10年前にバラバラになった、おれ達…
元気かな…

「何も変わってなかったね…ちよつとう

るさい。」

孤爪研磨

原作と同じになるようにします！

ここは東京の音駒高校、

あたしはココで快適青春Lifeを送るんだ(▽、*ゞ)エへへ

碧「女の子の友達作るもんね〜」

初日の挨拶って大事だよ、大丈夫！

家で練習したと思うから！

碧「月城 碧です！宮城からきました！よろしく…」碧!!!「いや被せんよ誰だよ!!」

黒尾「おまえ…碧、だよな？」

碧「だからそう言って…トサカ!?!」

黒尾「相変わらず失礼だなおめーは!!」

碧「あ、…まさか、太郎くん!?!」

黒尾「やっと思いで出してくれたか…花子…!!」

碧「誰が花子だよ!!」

黒尾「ブーメランだろ俺も太郎じゃねーから!!クロだよ!!」

…:クロ?クロ…どっかで聞いた事ある気が…

どこだっけ、ん?んんんんん???

『あおー俺らのこと忘れんなよ!!』

碧「……クロおおおおお!!?!?!? あ! ホントだ髪変わってない!!」

黒尾「基準髪かよ!」

クロは10年前にあたしが東京にいた頃の幼馴染。

親の都合で引越すことになって、そこから連絡をとってない。

ていうか顔なんて忘れてたよ……(?!>?・・?) テヘペロ

あれ、クロがいるってことは……もしかして、!!

碧「もしかしてケンタもいるの!?!」

黒尾「研磨な!?!」

担任「お前から感動の再会のとこ悪いが、座れ」

碧 黒尾「うっす」

2話 再会2

席はクロの隣の席。

理由は背が高いから邪魔にならないように。

え、理不尽すぎない？

碧「今頃女子友作ってキャツキャウフフする予定だったのにッ…」

黒尾「アタシがいるじやない♡」（裏声）

碧「やだ可愛くない!!」

やだよこんな180超えた

筋肉つきまくってるダミ声女なんて

黒尾「おい声に出てんぞ。そーいや俺らガキの頃身長競ってたよな」

碧 黒尾「……………」

碧「184.7cm!」

黒尾「187.7cm!」

黒尾「っしやあ!」

碧「ぐあああああ!あたしが負けた、だど!?!」

昔はあたしの方が高かったのに……！ミリ単位だけど！

くつそ……筋肉もついて男らしくなりやがって……！！

碧「ハッ！体重で競うのはどーだっ！」

黒尾「いやムリムリ。俺の方が重いに決まってるだろ？」

碧「まさか研磨も成長して腹筋とかバツキバキに……！！？」

あの可愛かった研磨が……！？それだけは嫌だ！！

せめて研磨だけは可愛さを保っていて欲しい！！

黒尾「いや、研磨は……あゝ……」

碧「何！もったいぶらないでよ！」

あの純粋で無垢だった（気がする）研磨に何があつたの！？

まさか素行不良になって毎日補導とか……！？

黒尾「説明がムズいな……とりあえず今日男バレ来いよ」

碧「まだバレーやってたんだ」

黒尾「お前はやってねーの？」

碧「いやバリバリやってた」

黒尾「やってた？」

碧「何か疲れたからやめた。」

黒尾「お前…いじめられ 碧「てねーよ」なんだ。」
やめたつつつてもプレーしてないだけだけどね。

筋トレとかは毎日してますとも。

言うの面倒臭いから言わないけど。

碧「音駒の男バレねー、強いのか？」

黒尾「ガキの頃会ったろ、猫又監督。」

碧「……………あー、分かる、あのおじいちゃん？」

黒尾「そ。ココは守りの音駒、なんて言われてんだぜ」

碧「へー、レシーブ得意ってこと？リベロになる奴相当じゃん。」

黒尾「このクラスにいるぜ？」

碧「なぬ!?誰だ!（キョロキョロ）…わっかんね。」

黒尾「諦めんの早いかよwおーい!夜久ー!」

え、ちよ……この子…

碧「クロ!いくら上手いからって女の子男バレに入れちゃダメじゃん!!」

黒尾「（キョトン）…ぶっひゃっひゃっひゃ!!」

え、ちよ何、急に怖い!

遂にトサカに脳まで侵食されたの…!?

夜久「俺は男だ転校生!!」

ええええ!?こ、コレが男!?

目は大きいし肌はすべすべだし可愛らしいサイズだし…

生まれてくる性別間違えたんじゃない…

夜久「聞こえてんだよ!!」

碧「はああく、男…世の中分かんないもんだな…あ、月城碧!よろしく!」

夜久「夜久衛輔だ。黒尾、お前元から知り合いだったのか?」

黒尾「あー、10年前に別れたもう1人の幼馴染。まーそんなことより、やつ君。こ

いつマネにどーよ」

夜久 碧「は?」

3話 再会3

は？何言ってるのこの男。

は??マネージャー??男バレの?は?

何考えてんの!!?

夜久「いや、俺はどっちでもいいけど…仕事すんなら。」

碧「あたしが仕事しない悪女みたいな言い方やめてくれます!？」

黒尾「ダイジョーブ、馬鹿だけどバレーに関しては頭回るから」

え、今普通にデイスられた？

馬鹿?お?お?やるか??

黒尾「研磨いるぞ」

碧「My sweet Angel!!」

黒尾「ハイ決定」

夜久「無駄に発音いいのがムカつくな」

昔から研磨は可愛かったな

もー、目がクリクリで肌がモチモチすべすべで…

はあ……身長とか諸々変わってなきやいいのに……↑

黒尾「マネの仕事分かるか？」

碧「スコアつけたりスポドリ作ったり備品の管理したり……とりま選手のサポートでしよ」

黒尾「そ。じゃあ分かんないことあつたら聞けよ？」

碧「あ、教えてくれないのね」

黒尾「なに、手取り足取り俺が 碧「なんでもないでーす」おい傷つくだろ」

―――そんなこんなで放課後―――

碧「研磨は!? 研磨はどこ!!」

夜久「中毒かよ」

黒尾「もうすぐ来るって……お、研磨！」

研磨「うるさいよクロ……え、………碧……？」

ずぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

!!!!!!!

碧「けええええんまああああ!!!」

研磨「スっ…ε|| (・ー・)」

碧「何で避けるのさ! つーか髪!! プリンじゃん!」

研磨「相変わらずうるさいね碧…:音駒に転校してきたの?」

碧「そ! 男バレのマネやることになったよ!」

研磨「ふーん…」

黒尾 碧「照れてる」(ニヨニヨ)

研磨「違う。うるさい。」

夜久「お前から研磨をいじめんな!」

黒尾 碧「やつ君怖あゝい」

夜久「よし、碧お前は黒尾と同類だ。」

碧「えええ!?!」

黒尾「おめでどう、君はコツチの人間だ。」

碧「嫌だあああああ!!!」

研磨「碧うるさい」

研磨辛辣…(っ。っ。っ。っ。)

そんな子に育てた覚えはないわよ!!

でも見た目は変わらず可愛い!

黒尾「とりあえず俺ら着替えるから入部届け出してこいよ」

碧「体育館来る前に言えよ! 階段ダルいじゃん!」

黒尾「ついでに教室に忘れもんしたから取ってきてくんね」

碧「ハーゲンダッツストロベリー味」

黒尾「高えなオイ」

この碧さんをこき使いやがって…!

40秒で戻ってきてやる。あたしはドー○おばさんの娘だからな!! (…)

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

教師「コラー! 廊下は走るな!!」

碧「何で走つちやダメなの!!」↑

教師「え!? あ、危ないだろ! 走ったら!」

碧「じゃあ何で体育をやらせるの!? 危ないじゃん!!」↑

教師「いや体育は体動かすためにやるじゃん!?」↑

碧「じゃああたし今体育やってる!」↑

教師「屁理屈言うな!」

ギャーギャー。、(。、旦那。)。ギャーギャー。、(。、旦那。)。。

ギャーギャー。。(。、ん。)。ノ。

戻ったのは40分後でした☆

黒尾「おせえ!!」

「こちら月城碧のイメ画です！

私のリア友の

どらごんフルーツ君が描いてくれました！

いつかpixiv投稿するので見てあげてください！

4話 新しい仲間

黒尾 s i d e

黒尾「どこ行ってたんだよ！」

碧「いやちよつと先生と言い合つてて」

黒尾「入学初日から何やってんだよ…」

碧のこういう所は昔から変わってない。

いつも目的から少し遠ざかる。

小さい頃は鬼ごっこしてんのに急に立ち止まって蟻見続けるし、

おつかい頼まれてプリン買う予定が何故か椎茸だったり…

黒尾「お前のこと紹介するから早く来い。」

碧「うえーい。」

黒尾「集合!!」

スパイク練が終わったから後はレシーブ練くらいか…。

ちよつと紹介が長くなりそうだからちよつとどいいな。

碧 s i d e

黒尾「喜べー、今日から入る3年のマネだ。」

碧「月城碧でーす！よろしく！」

黒尾「コイツもバレーやってるから仕事は出来るから困ったことあれば何でも言えよー。」

とりあえず自己紹介だ。知ってるだろうが、主将の黒尾鉄朗な。

好物はサンマの塩焼き」

夜久「夜久衛輔だ！さっき言ったけどな！好物は野菜炒め！」

やつ君可愛いな…野菜炒めって美味しいよね。

あの特別美味い！ってわけじゃないけど野菜ならではの甘さとか…。

海「俺は海信行だよ。好きな物は海ぶどう。よろしく。」

海ぶどう!?え何それ!?

海になってるぶどう!?聞いたことない!!

研磨「俺のことは知ってるからいいでしょ…。」

こっちは福永招平。好きな食べ物はあたりめ。」

福永「(ペペり)」

碧「(ペペり)」

シャイなのかな?つーかあたりめって…しぶいな

山本「ヤ、ヤマモトタケトラデス」

碧「え、ちよごめん、速すぎて聞き取れなかった。」

黒尾「コイツ全然女と喋ったことねーんだよww」

見た目スゴいのに：

碧「見た目カッコイイんだから堂々としてりやいーんだよ！ほら！名前は！」

山本「や、山本猛虎です！好きな食べ物はやきそばパンツス！」

碧「カッケー名前じゃん！いいねやきそばパン！」

山本「あああ、アザす！！／／」

黒尾「オチたなww」

海「オチたね」

リエーフ「猛虎さん顔赤いッスよ！俺は灰羽リエーフです！

音駒のエースになる男です！！好きな食べ物はおいなりさんです！」

碧「デカツ、ハーフ？」

黒尾「ロシアとのハーフで、意味は獅子らしいぜ」

碧「ほえ、」

犬岡「俺は犬岡走ッス！好きな食べ物はからあげです！」

あー、からあげね」

食べたくなってきた……

芝山「し、芝山優生です！好きな食べ物はおムライスです！よろしくお願いします！」

碧「（ぎゅ）可愛い。持って帰る。」

黒尾「声がガチかよ」

碧「ポジションとかは練習見て覚えるから！

あたしとクロと研磨は幼馴染だから2人に話すみたい気軽にいいからね！」

黒尾「それじゃあ、よろしくお願いします!!」

全員「お願いします!!!」

5話 仕事と過去

碧 side

マネの仕事知っても

あんまやったことないんだよな

えーと……まずはビブスの洗濯かな？

こういう家事系なら何でも出来るけどさ。(。ω。)(ドヤツ

碧「10年か……」

洗濯をしながら考える。10年前とはもう丸で違う

体つきは変わってた。

昔は2人ともヒョロっとしてたのに

今じゃちゃんと筋肉もついてるし手とかごつくなくなってるし……

研磨は例外だけだ。

碧「〜♪」

なんだっけなくこの唄、10年前唄ってたんだよな……

碧「あたしとあなた どこで出会ったのかしら」

洗濯機の中の水を見て何とか思い出そうとする
なんだっけ……

碧「もう 覚えていないけど 過ごした日々は 忘れない」

『あはは！速く速く!!』

『までよ〜!!』

『2人とも速いよ…』

碧「ずっと遠く なにも分からなくなっても」

『あ！帰らなきゃ！ばいばーい！』

『また今度なー!!』

『またね』

碧「あの笑顔が映る水面《みなも》は」

『碧……………』

碧「忘れは……、」

『ごめん、ね……』

碧「しない……（ガタンツ）…ツ、は…」

何で今更…あの時のこと、……

床に落ちた洗剤を拾って元の位置に戻す。

それは気を紛らわせるためでもあつたかもしれない。

碧「ツ…（ギリツ）」

忘れよう。その為には今とは今とはかくマネの仕事だ。

ビブスが洗い終わる前にスポドリ作りを終わらせて、

その後に洗い終わったビブスを干して記録もとって……。

黒尾「碧く、お前服のサイズなんぼ？」

碧「うわ、急に現れんなよ。えーと、しくらい。あ、バレージャージ？」

黒尾「そ。血液の赤だぞく」

碧「何それww」

黒尾「？何かあつたか？」

碧「…！いや？何も無いけど。」

え、怖…何で分かるのこのトサカさん……

幼馴染だからとかじゃなくね？10年ぶりですし？

黒尾「ふーん。あ、今日スポドリはいいから。」

碧「りよーかい。」

黒尾 side e

碧の様子が何か変だったような……気のせいかな？

つーかやつぱ10年前とは違えんだな……。昔はアホっぽくて可愛かったのに今は……

可愛いつーより、美人、つーか……

研磨「クロ」

黒尾「おわっ!?何だ研磨か、驚かせんなよ」

研磨「そっちが勝手に驚いたんじゃない……。…碧のこと？」

黒尾「……!!」

これが幼馴染の絆ってやつなのか考えてる事はすぐに分かるらしい。

それとも研磨が鋭いだけなのか……？

研磨「何かちよつと、変わったよね……」

黒尾「お前もそう思うか。なんつーか、こう、雰囲気……」

研磨「うん……おれ達が離れてる10年の間に、何かあったのかもね……」

6話 独り

碧 side

部活が終わってフラフラと帰る用意をする。

さっきの唄マジで何なんだよ……

むしやくしやすするうう……ッ

黒尾「碧く、飯食ってかねー？」

碧「あー、ごめん、今日家3日目カレーだからやつつけちゃわないと！」

夜久「キツイやつだな」

黒尾「いーじやねーか、おばさんのカレー美味しいし！」

碧「(ビクッ) そ、うだね、つーことで！じゃね!!」(ダッ！)

犬岡「わっ、速っ！」

研磨「………？」

碧「はあ……ッ、はあ……ッ……！」

暑い、息が切れる、喉が痛い、足が重い、でも何より……ッ

碧「ただいま……」

心が痛い……ツ、

あたしの親は10年前に交通事故で死んだ。

引越して新しい家に行く途中、トラックに突っ込まれた。

運転してたお父さんは即死。

あたしはお母さんに抱えられるようにして守られていて、軽傷だった。

お母さんの最後の言葉は……

『碧……ごめん、ね……』

碧「ツ……」

あの時あたしがいなければ、お母さんは自分を守れた！

そもそも引越しなんてなければ誰も死ななかつたのに……!!

碧「ツ、クソ!!」(ガシャン！)

テーブルの上に置いてあったマグカップが割れた。

それがあたし自身と重なって見えた。

粉々に砕けて戻れない、あたし達家族だ。

まさかク口達に会うなんて思ってもなかつた。

というか色んな整理がつかなくて正直ちよつと忘れてた、でも

臆気に記憶の隅にあった。

でも会ったからには心配とかはかけたたくない。

もうこの事だつて10年かけて自分で踏ん切りをつけた。

その為に、お世話になった施設から出て

引越すはずだつた新しいこの家に高一から住み始めた。

両頬を叩いて自分に言い聞かせる

碧「(パンツ!) しつかりしろ、碧……」

もう絶対に泣かない。強くいるんだ。

バレーも、人生も! 誰にも負けないくらい!

胸を張って、前を向いて歩くんだ!!

研磨 side

やっぱり碧の様子が変だつた……

クロが碧のお母さんのことを言った時にビクついてたし……

暴力とか……? でもおばさんに限ってそれはない……

あの人は凄く優しい人だから……。

黒尾「研磨、行くぞ」

研磨「今行く。」

碧は、おれ達に何を隠してるんだろう……。

おれやクロにも言えないこと……

あの碧が……？何でも話していつも明るいの……

黒尾「どーした、難しい顔して。」

研磨「……なんでもない。」

分かんない……。

あの笑顔の裏に、何かがあるのか……

研磨「親友って言ったのは、そっちなのに……」

黒尾「？何か言ったかー？」

研磨「何も言っていない」

それとも、10年経ったらもう、違うのかな……

7話 聞いてない!

碧 side

碧「皆の碧ちゃんの登場だ〜!」(ガラツ)

しーーーーーん……………

はーい、誰もいない知ってた。

だって今4時だもーん。朝練は5時からだけどね〜

碧「ちやつちやと仕事しますかねえ」

ワツセワツセ T (| |) E

? (. . ∇ . .) / オリヤー

碧「バレーの支柱で重いんだつーの…よっ、と!!」

いくつかネットを張ってタオルの準備もして少し休憩する。

碧「はあー、やり遂げたあたし10分で終わらせるとか神すぎ」(ごころーん)

つーかジャ○プ見たけど鬼滅マジヤバイよ

なんなん?! 禰豆子カツコよすぎやる!!

ホント……アニメ1話から見たよ? マジさあ……ホント…

ダメだ今あたしの辞書に語彙って言葉ないわ。

碧「童磨推しなり（＊・＊）ムフフ」

つーか童磨と琴葉なんだよねえええええ!!

ホントマジ何で幸せにならなかつたのおおお!!!?

碧「い、ツ伊之助え……ッ」

もーさ、童磨VS伊之助とかやめよ!!?あたし泣くよ!!?

碧「誰か彼らを止めてえええええ」(懺悔)

黒尾「なーにしてんだよ」

碧「くあwせdriftgyふじこーp!!?!?!」

黒尾「落ち着けよ」

碧「急に來ないでくれますう!?!そおいうのお!まぢ激おこファイなりーぶんぶんど
リーム!」

黒尾「お前のテンション何なの」

碧「お前の朝のテンションの低さの方が何なの」

全くもお!早起きして頭セツトするくらいなら

ちやんと睡眠とつてから來なさいよねえ!つーか來るの早いかよお!

黒尾「寝癖だつて知つてんだろ」(グリグリ!)

碧「いだだだだだ!!ごめんて!!あたしが悪かったですって!!」

つーか何で分かんのか!? エスパーなわけ!?

いやいや、そんなんあるわけないよね!

クロのばーか! あんぽんたーん!

黒尾「言つとくけど全部声に出てっからな?」(黒笑)

碧「やべっ!!」(ダッ!)

黒尾「待てえ!!」(ダッ!)

チクタクチクタクチ——(——ω——)——ン〜10分後〜

黒尾 碧「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ」

碧「はあ、はあ、マジ意味わかんないんですけどホント何でそんな速くなってるのよ

昔はもつと遅かったじゃん」

黒尾「ぜえ、ぜえ、10年前と一緒にすんなよ

お前こそ速すぎだろ」

碧「碧様なめんなよ」

黒尾「そーいやよ、」

碧「ん？」

黒尾「明後日夏休みだろ？」

碧「あーね、で？」

黒尾「合宿♡」

.....(?)。▽。アン?

碧「そういうことはもっと早くに言えやコラ水の呼吸やんぞオラア!!!」

黒尾「ジャ○プ入れてくんなよ!!」

8話 仲間たち

碧side

この万年トサカが…ッ

頭まで鳥になったらお終いじゃねーかよ

鳥頭ですってか!

てくてくてく…あれ今何してたっけ? ってか!?

とりあえず朝練終わらせて教室行く時に聞かか! (キレ気味)

ー朝練終了ー

碧「どこと合宿だよ!」

黒尾「鳥野と梶谷と生川と森然」

碧「知らねーし!!」

あたしついこの間まで宮城いたのよ!?

東京のことなんか知らねーっつの!!

黒尾「3本の指に入る木兎つてのがあるぞ」

碧「……………へいへいへーい!!」

黒尾「それぞれw」

碧「場所は？」

黒尾「森然、埼玉だよ」

碧「ああ、埼玉ね（´・ω´）フツ」

黒尾「何が（´・ω´）フツだよ埼玉県民に謝れ」

碧「翔ん〇埼玉をよろしく！」

黒尾「宣伝かよ!!」

碧「埼玉って宮城と近い？よね」

黒尾「まあ遠くはないわな」

碧「ふーん…」

黒尾「なんだよ、男か？」

碧「いたら意地でも東京来ねーよ」

黒尾「お前なら納得出来る」

久しぶりにユース仲間と連絡とるかな

急に東京行くわ、とか言ってきたし

碧「ちよっとお花摘んでくる↑」

黒尾「世代結構越えてね？何年前の言い方だよw」

誰と話すか……、

まあ、相棒かな。ここは。

碧「……あ、もしー？あたしあたし」

?? 『あんった今どこ居んのよ!!!』キーン…

碧「ちよ、鼓膜破れるわ!!東京つつたじゃん!!」

?? 『東京行くわくだけで納得出来るわけじゃないでしょーが!!!』

碧「あーうるさいうるさい!」

?? 『つたくもう!ユース抜けるわけ?』

碧「抜けるわけないじゃーん」

?? 『でもアンタ今東京でしょ?』

碧「んー、毎回宮城まで行くとか?」

?? 『馬鹿でしょアンタ』

碧「阿呆に言われたかねーな」

?? 『うるさいわね!明後日から合宿指導なのよ?』

碧「合宿指導?しかも明後日?」

え、合宿とダダ被りじゃん

つーか指導ってなに?え、教えんの?誰に?

?? 『なに？用事でもあるわけ？』

碧 「んー、まあ、ある。1週間はムリ」

?? 『こつちも1週間合宿指導よ』

碧 「あー、じゃーそっち無理だわ」

?? 『監督に言つといてやるわよ。あ、超怒つてたよ』

碧 「げえ…」

?? 『会つたらシバくですつて』

碧 「行きたくない気持ちが大きくなったよ。…とりま頑張れ」

?? 『アンタもね。じゃーね』

碧 「あーい」

さーて、戻ろ戻ろ。

つーか合宿指導とか初めてなんだけど、行かないけど。

小学生に教えんのか？インストラクター的な？

碧 「まー子供嫌いだし、いっか！」

黒尾 「碧く、次移動だぞー」

碧 「やべ！忘れてた！あたしの荷物は!?!」

黒尾 「俺は紳士だから持ってきてやったよ」

碧「でかした！褒めて遣わす！」

黒尾「オレは下僕か」

9話 その頃

「ねえ俺納得できないんだけど!!」

「うるせえ!」

「急に、あ!東京行くわらばいばい☆とか言われて納得出来る!」

「星はついてなかったよな」

「言い方もあんなにうざくなかったよな」

「その2人黙って!」

「でも東京つてどこ行くんすかね…」

「東京つつつたら強豪ばつかだべ」

「そもそもユースどうすんすかね。」

「あいつの意思だからしょうがねーべ。」

「あ、東京つて言えば…」

「何だよ」

「明後日から合宿だ☆」

「早く言えやア!!」

「怒らないでよー!!俺だつてついさつき聞いたんだよ!埼玉で烏野と音駒と梶谷と森然と生川でやるんだつてさ!」

「うちあんま強豪じゃないのによく加われましたね」

「そーゆーネガティブ思考しないの!!てゆーかそれだつたら烏野の方が呼ばれるの不思議じゃん!!」

「あれだろ確か、音駒と烏野でごみ捨て場の決戦」

「つーか何日合宿すんだよ」

「確か、1週間だと思う」

「結構なげーのな」

「俺たちの力見せつけてやろーね!」

「いつも通りやんぞお前ら」

「うーす」

「だな」

「頑張ります!」

「ちよつと!?!俺が主将だよ!!」

「主将っぽくないから仕方ないんじゃないんですか」

「ネガティブ思考の次はDS思考なの!?!人の心に傷をつけるんじゃないやありません!」

「悪い見本はお前だ」

「なんつでさ!!」

「…全部?」

「それな」

「直しようがないじゃん!!皆いくら俺がカツコよくても過度な僻みはやめてよね!!」

「誰が僻むかよ!!」

「お、俺はカツコイイと思います!」

「グスツ…俺は良い後輩を持ったよ…」

「ばっちいからやめなさい」

「ばっちいって何さ!!」

「女マネとかいるっすかね…」

「欲望に忠実ツスね」

「碧がいたら自慢出来たのにいいいい!!!顔は良いし仕事出来るし面白いしバカだし!」

「最後悪口だろ」

「確かにアイツは自慢のマネだったよな」

「県内に碧以上のマネはいなかったよな」

「もう県外だけだな」

「どっか他の高校でマネやってると思うと…むきいいい!!」

「キメエ!」

「ヤンデレかよww」

「どっちかつつーとメンヘラww」

「もーこの恨みは合宿で晴らすよ!!」

「恨む理由が下らなさすぎるww」

「碧恨んでもしやーねーべ。親の転勤とかじゃねーの?」

「あれ?知らないっけ?碧一人暮らしだよ?」

「マジで?」

「あー、何か言ってた気がする」

「事故だったんすよね…」

「碧さん一人で東京とか大丈夫っすかね…」

「飴くれるおじさんに着いてきそうですね」

「ホントにやりそう!ヤバイ心配になつてきたよ!!」

「碧だつて子供じゃねーんだから…」ホントに安心出来るの!?」う…」

「どこにいのさ…碧ー!!!」

10話 昔は……(w)

黒尾 side

3日なんてあつという間に過ぎてもう合宿当日。

朝の3時に集合してバスで埼玉まで行く。

俺たちは2時半くらいに来た。

(研磨は俺がたたき起こした↑)

黒尾「いっちばーん」

研磨「クロ子供みたい……」

碧「残念碧ちゃんが一番でーす」にゆっ

黒尾「おわっ！」

研磨「碧早くない……?何時に来たの……」

碧「1時」

黒尾「はあ!?!おま、早すぎだろ!バスも来てねーだろ!」

碧「バス貸してくれる人に挨拶しなきゃじゃん。その前に全体の流れ確認して

備品の点検して乗せる荷物の確認。」

黒尾「マネ出来すぎだろ感動するわ」

研磨「昔はバカだったのにな……」

碧「え研磨クン？今お姉さんのこと普通にデイスった？デイスったよね？」

研磨「碧が姉とか……疲れる……」

碧「ちよつと鉄子聞いたア!?妹が反抗期よ!!」

黒尾「もくお姉ちゃんの言うこと聞きなさい研子！」

やべ、裏声出そうと思つたら

変なオカマみたいな声出た。

研磨「ネーミングセンスないし裏声とダミ声混じつてて気持ち悪い……」

碧「その場の状況説明ありがとう研磨。てゆうかクロオカマに謝んなよ」

黒尾「俺の心ズタボロよ？そして何で俺の思つてることが分かった？だが甘いな！

今の時代はオカマと言うワードも差別対象だ。正しくはトランスジェン

ダー。

リピートアフタミー？」

碧「transformers」

黒尾「発音すげーけどお前が言つてんのトランスフォーマーな!？」

研磨「古いね」

碧「そんなことよりさア………酔った……ウブ」

黒尾「まだバス動いてねーのに!？」

研磨「そういうえば碧って人一倍乗り物ダメだっけ」

碧「タクシーを想像しただけで酔える……」(……)

黒尾「瀕死になってまでドヤ顔すんなよ！」

思い返してみれば昔俺ら3人でお使い頼まれた時に

バスに乗ってアイツ白目剥いたっけな……

あと酔うの分かってるくせに何度もブランコ乗った。

研磨「碧……この本、気になって電子版買ったんだ……」

碧「よーし、一緒に見よ……」

黒尾「何で酔って瀕死なのに本とか読もうとしちゃうの!？」

※酔わない為に本読もうはオススメしません

マジで死ねます。(体験談)

対策としては前に座って寝ないで常に前を見ましよう

横を見ると目で追っっちゃって余計酔います(体験談)

黒尾「ん？何か不思議な講座始まったぞ……」

研磨「1人で何言ってるの……?？」

碧「ク口はそういう子だから……」

黒尾「最期の言葉がそれでいーのかお前……」

碧「同情するなら金寄越せぶつ潰すぞ」

黒尾「すずちゃんそんな言い方じやなかつたらろ！怖えわ!!」

研磨「名前言つても誰も分かんないでしょ……」

研磨よ……地味にメタいぞ。

あと碧の目がすわつてて普通に怖え。

こうして皆が来るまで俺らは10年ぶりに

幼馴染3人で話した。

11話 嘘だろ!?

碧 side

碧 「自由だああああ!!!」

夜久 「うるせーぞ碧!!」

バスで埼玉までとかマジカスいわ。

殺しにかかってんな。あたしの顔が良い僻みね。

夜久 「声に出てんぞ」

リエーフ 「別に碧さん特別美人じゃなくないっすか?」

碧 「そうか分かった合宿中テメエのスポドリは作らねー。」

リエーフ 「ええ!?! 酷いつすよー!!」

碧 「酷えのはテメエだわ!! つーかあたしに着いてくんない!

あたしはマネとの顔合わせで別るところ行くからクロに着いてけ!」

リエーフ 「先に言ってくださいよー!!」

碧 「殴る」

芝山 「お、落ち着いてください!」

碧「ん？あたしの家に来たって？」

黒尾「明らかな脅迫やメナサイ」

何だようちの高校は可愛い奴全然いねーじゃん？

前は可愛い後輩山ほどいたのに!!その代わりうぜー奴もいたけど!!

日々日頃マネの仕事を頑張ってるあたしに対して癒しもないの!!

碧「せめてクロがもう少し可愛かったらな〜」

黒尾「俺は碧がもう少し大人しかったらな〜」

碧「人を犬みたいに！」

黒尾「そこは猫だろ。」

失礼しちゃうわコンニャロー!

お、あそこに見えるは女子の軍団。

いざParadise!

碧「どーも。音駒のマネの月城碧でーす」

雀田「よろしくー!あたし梟谷マネの雀田かおりね！」

白福「同じく白福雪絵だよ〜」

宮ノ下「生川の、マネの宮ノ下英理!よろしくね！」

大滝「森然の大滝真子です!よろしく！」

清水「烏野のマネの清水潔子です。」

谷地「やつ、谷地仁花であります！よろしくオナシヤス!!」ばっ！

おお…体育会系

皆美人よのう…眼福眼福むふふ（、艸、）

碧「よーし全校揃ったから早速…雀田「いや、あと1校あるんだ」え？」

え、音駒、梟谷、烏野、森然、生川…揃ってね？

揃ってないにしても遅刻よ??あたし、遅刻するやつ嫌いよ??

大山「ごめんなさーい遅れました、青城の大山愛菜です！」

………What? 青城? SEIJO? は? は? ???

え、ま、まさか…青城って…青葉城西…?

い、いやあー、そんなまさかねえー!?

いやまあ? ないと思うけど確認の為主将の面を拝ませてもら…

及川「…」

碧「…」

目と目が合ったらバケモンバトル★↑

碧「碧は逃げるを選択したア!!」

及川「だが逃げられなかったア!!」ガシッ

碧「うおわああああ！離せこのやろー!!なんつで及川がいんだよ!!」

及川「合宿だからだよ！碧こそ急に転校とかなんの！」

碧「うっせーチビ!!」↑184.7

及川「ミリ単位でしよーが!!」↑184.3

碧「つーかいいい加減離せよおお!!」

及川「逃げるでしよーが!!」

碧「当たり前だよなあ！」

及川「ちよつと!!」

12話 あたしの為に争わないでっ（言ってみたかった）

碧 side

くつそあの鰹節イ…思いつきり掴みやがって

自分のパワー考えろってんだよ。

それにあの女！マネの癖に近くない!?

新しいマネなのか何なのか知らないけど!!モブみたいに目立たない顔して!

あたしは人よりは良い!はず!!

黒尾「どーした。嫁いじめる姑みたいな顔してんぞ」

碧「鉄子!床は拭き終わったのかい!?!あたしの美しい顔が映るまで磨きなさい!」

黒尾「お義母様!どっちかつつとアタシの方が可愛いと思えますわ!」

碧「クロに負けたらあたし一生旦那出来ないじゃん!研磨!結婚しよ!!」

研磨「むり……」

碧「芝山ア!!」

芝山「ええ!?!え、えつと……」

夜久「後輩怖がらすな!」

碧「いつも後輩（リエーフ）に回し蹴りしてる人に言われたくないね！」

夜久「なにを!？」

碧「なにさ！」

黒尾「2人とも俺のために争うのはやめろって、な？」

碧 夜久「争ってねーよー！」

碧「クロのバーカ！ちよつとマネんとこ行って癒してもらおう！」

クロ「先体育館入ってからなく集合時間分かってるかー？」

碧「当たり前だろーが！」

つーかタイトルのにあたしが言うんじゃないの!？」

なんでクロなのさ!!

てゆーか一体全体どこをどう聞いてたらクロを取り合ってたんだよ！

大山「えつと、：碧ちゃん？さつきは徹がごめんね？」

碧「：いいえ！大丈夫ですよ！大山さんはいつからマネやつてるんですか？」

大山「んー、去年あたりかな！」

嘘つけや!!去年あたしいたけどデメーなんか見たことねえわ!!

どーせ顔目当てのミーハー女だろ!!

つーか名前で呼ぶんじゃねえよ!!

碧「どうしてやろうと思ったんですか？」

大山「私バレーって今まであんまり興味なかったんだけど徹たちのバレーみたら一目惚れしちゃって！とっても素敵にプレーするのよ！」

一目惚れ？顔にだろ（。▽。）ハッ！

プレーの仕方なんてあたしがよく知ってるわ！

なんせ2年青城でマネやってましたから!!

そもそも、ぽつと出の新人マネが何軽々しく選手呼び捨てにしてんの??

見ろよあいつらの顔、疲れきってんじゃねえか!!

ん”ンツ、いけないいけない、あたしが悪女みたいになってるではないか。

碧「そうなんだ！あ、もう私行くね？またn… ドンツ おふつ、」

国見「碧先輩…！」

碧「英く!! 久しぶりだあく！相変わらず可愛いなアー！塩キャラメルやろう。」

国見「ありがとうございます」

大山「…碧ちゃん国見くと知り合いなの？」

…:…:ここいらで喧嘩でも売るか↑

碧「あたし高一から高二まで青城に居てマネやってたんだ！

高三になる頃に引越すことになっちゃったんだよね」

大山「え…そ、そうなんだ！」

お顔歪んでますよ？（ノ▽≦）ノぷぷーツ

嘘バレちゃったみたいなくまぢぢw w

ん？つか英名前呼びじゃないの？

国見「……………」

皆さんおわかりいただけただろうか

英の顔がこれまでにないほど歪んでいるのです

どんだけ大山嫌いなんだよ、心なしか抱きついてる腕も強くなっ…いででででで！

碧「あ、英く〜ん。ちょーつと離してくれるかなあ〜？」

国見「……………（コテン）」

碧「ぐはあつ！その首コテン誰に教わったの！」

国見「及川さんです」

碧「及川マジ殴るグツジヨブ」↑

とかやってるうちに時間がヤバい。

マネ達に癒されはしなかったけど英いたからよし！

この時あたしは知らなかった——。

この後想像を絶する地獄が待ち受けてるなんて――。

13話 地獄とはまさにこの事

黒尾 side

碧「碧様の降臨じゃーい」

黒尾「ギリギリだぞアホ」

碧「バカつつつたこと根に持ってんのかバカ」

黒尾「チビに何言われても動じませくん」ググ…ツ

碧「いででででで！ほっぺ引っ張んなし!!」

黒尾「つーか後ろの誰？」

碧「英」

黒尾「いや誰だよ」

コイツ本当国語ダメだな

昔から話噛み合わなかったり、会話成り立たないことあったけど…

及川「国見ちゃん!!どこー!?!」

碧「ほら英、及川が呼んでるよ」

国見「…：分かりました」

あのジャージ…青城か？

碧のやついつの間にかに青城と知り合ってたんだ？

及川「あつ、碧く☆」

碧「えく…」

及川「まだ何も言っていないし！マネ頼むねく」

碧「いや自分とこのマネに頼めよ…」

黒尾「なに、知り合い？やけに親しげだけど」

碧「あたしココ来る前青城にいたから。」

黒尾「初耳なんですけど」

碧「言つてなかったからね。つか一話で宮城から来たつったじゃん」

黒尾「メタ発言すんな。」

正直青城のことはよく知らない。

全国には出場したことないって言うし

合宿だつていつもは音駒と梟谷、生川、森然でやつてて

烏野は音駒とのよしみで来たから納得出来るが…青城とはどこも縁がない。

猫又「選手の自己紹介は合宿やつてくうちに知つてけばいいだろう

マネージャーの自己紹介でいいんじゃないか」

武田「そうですね。では烏野からお願いします」

清水「3年の清水潔子です。よろしくお願いします」ペこっ

谷地「い、1年の谷地仁花であります！よろしくお願いシャス！」ばっ！

体育会系かよww

雀田「梟谷の3年、雀田かおりです！仲良くなれたら嬉しいな！よろしく！」

白福「同じく白福雪絵だよ、よろしく」

宮ノ下「生川の宮ノ下英理です！よろしくお願いします！」

大滝「森然の大滝真子です！よろしくお願いします！」

大山「青城の3年の大山愛菜です！よろしくお願いします！」

碧「音駒の月城… 及川「浮気だー！ついこの間まで青城だったのに！」うるっせえ

あたしの自己紹介を遮んな鯉節イ！音駒！月城碧！夜露死苦！」

黒尾「キレんなよwwスケ番になってんぞww」

猫又「今回はなあ、指導者も着いてくれる特別制だ。5人。」

夜久「指導者？誰ですか？」

夜久が言つたと同時に体育館のドアが開いた。

……女？いや待て……あれて……

猫又「女子日本ユース代表の選手だ」

「はあああああ!!?!」

菅原「ユースの代表!?!」

田中「女子だとおおお!!? アリガトウゴザイマス!!」

でもなんで5人…?」

バレーは6人プレー。あー、女バレーとかあんま見ないからなア…

本庄「本庄夏（ホンジョウ ナツ）、よろしく!」

宮司「宮司夢（ミヤジ ユメ）です。よろしく!」

荻野「荻野幸（オギノ サチ）です、よろしくお願いします!」

今川「今川柚季（イマガワ ユヅキ）…よろしく…!」

春風「春風巳里（ハルカゼ ミサト）です、よろしくお願いします」

つーか女子とはいえ身長高えなく…

…アレ、碧どこ行つた?

碧「ソオ… ガシツ ひつ、」

本庄「どーこ行くのかなあ? 碧ちゃん♡」

碧「いやちよつと蟻を見に行こうかなって…」

本庄「下らないこと言つてんじやないわよ」

碧「辛辣かよ！つーかなんている訳？」

本庄「コツチのセリフよ。マネやってんの？」

碧「そーゆーこと。だから指導はあんたらに任せ… 本庄「アンタもやんだよ」いや
マネあるし!!」

本庄「そんなん両立しろ」

碧「なんか今日当たり強くね??簡単に言うけどマジそれ地獄だよ!」

え、ちよ、なんでそんな知り合いチツクに話してんの？

まさかもう1人のチームって…いや、まさかな…

今川「…碧先輩は、女子ユースの主将だよ」

「はああああああ!!」

14話 試合開始前

碧 side

及川「ちよつと碧！聞いてないんだけど！」

碧「あゝうるさいうるさい！そーですよ女子ユースの主将ですが何か！」

日向「す、スツゲエ！あ、あの！皆さん身長いくつですか!?あとポジション！」

なんだこのちまつとした生き物は…

可愛いな。持ち帰りたい。↑

碧「184.7だよ。そんでミドルブロッカー」

本庄「180.3で、ウイングスパイカーよ」

宮司「167.4で、リベロです」

荻野「176.9で、本庄先輩と同じウイングスパイカーです」

今川「174.1で……セッター……」

春風「179.5で、主将と同じミドルブロッカーです」

日向「み、皆高い…!!」

なんだこの生き物は

持ち帰りたい↑↑

リエーフ「碧さんって一応凄かったんですね！」

碧「お前は処す。」

日向「し、指導って！なんかこう、必殺技みたいな教えてくれるんですか！」

本庄「あはは、違うよ。まずはあたしらの練習試合。1試合2セット連取ね！」

碧「おい待てや聞いてねーぞ？何校いると思ってるんだ6校だぞ!？」

つーことはぶっ続けて12セットとか有り得ねえだろ！」

今川「碧先輩…それ煽ってる…」

春風「1セットも取らせない宣言だね」

荻野「あ。DKやる気出したみたいです」

宮司「今どきの言葉w」

碧「いやね？あたしらだって所詮女子ですから？」

男よりタツパはないしパワーもないけど？積み重ねてきた経験と？信頼くらいは？

勝てんじやないかな〜とか思っただけだし？」

本庄「自分へのフォロワー下手くそかよ」

碧「うるせーよ！」

そもそも最近バレーしてないし？

あの烏野のヒゲ生えてる人のスパイクとか多分腕もげるしよ。

本庄「はああく、あまおう2パツク」

碧「おっしや全校ぶつ潰してやらア！そーと決まれば順番決めるぞ！

王様ジャンケンで勝ったところからな！袖季行つてこい！」

今川「なんで私が……………」

木兔「そういうことならウチだつて！行けあかーし！」

赤葦「どういう事なのか分かりませんが、まあいいです。」

黒尾「行つてこい研磨！」

研磨「クロがやればいーじゃん……………」

何か段々王様ジャンケン（セッター版）みたいになつてきたな…

まーいいだろ。（テキトー）

碧「よし揃つたな！かませ袖季！」

今川「(すつ…………)」

黒尾「な、なんて奴らだ…………無言でジャンケンしてやがる！」

な、なん、だど…!?!

王様ジャンケンと聞けば皆大声出して「ぎーいしよーぐー!!!」とか言つてんのに…

無気力組……恐るべし。いや、無気力以外にもいるけどね。

今川「決まったよ……」

えー、結果。

生川↓森然↓青城↓梟谷↓音駒↓烏野

……可もなく不可もなくというか……。

碧「まーいい。早くやろーぜ！練習試合!!」

本庄「恐るべし、あまおうの力……」

碧「カツコよく決めたのに台無しにしないでくれますか!?!」

15話 主将たちと、

黒尾 side

1セットも取れない、なんてことはどこの高校もなかったが
勝敗は俺らの負け。

正直ここまで強いとは思ってなかった。

バレーや、他のスポーツでも。どうしても体格の差は生まれる。

けど、それを諸共しないようなチームプレー。

黒尾「完敗だわ〜」

碧「ギリギリで負けたヤツが何言ってるんだよ。ん、スポドリ」

黒尾「マジで両立してんのかよw言ってくれば変わるっつの」

碧「頼んだら負けな気がする。ホント今のDKどーなってるの？強すぎ。」

クロンとこなんてしっつこいし繋ぐし研磨との幼馴染感見せつけてくるし」

黒尾「僻みw」

碧「ちっげーし！木兔は強すぎるし烏野とかなんなの!？」

あのチビちゃん、可愛いな〜とか思ってたらエツグイ攻撃してくるし！

あのセッター！影山くんだけ？ハイスペックすぎ！」

黒尾「烏野はなあ、因縁の相手だからなあ」

碧「ごみ捨て場の決戦。実現させるには烏野は白鳥沢に勝たなきゃいけない。牛若にね。」

あたしだったら一服盛るね。」

黒尾「スポーツマンシップに乗っ取れ」

碧「いや、その前に青城VS烏野か？これは分かんないな」

及川「ざあんねん！インハイでは俺たちが勝ったよ！春高も青城が勝ち上がるから

ごみ捨て場の決戦は実現しませーん！」

澤村「次は負けないからな！」

木兔「東京では梟谷が1位を頂くぜー！」

黒尾「俺たちがいるの忘れないでくれますか木兔クーン」

何か色々集まってきたしww

主将トークじゃんコレ。

碧「つーか及川、インハイで勝ったって白鳥沢にも？」

及川「牛若ちゃんの話はしないでよ虫酸が走る!!」

碧「はいはい、むしさんが走るね。」

黒尾「碧、読み方違う」

木兔「虫って走るのか！」

澤村「種類によるだろ……」

碧「やつべ、音駒記録とんの忘れた！書かなきゃ！」

黒尾「俺らやつとくけどー？」

碧「あたし流だから多分ムリ」

及川「青城のもとつてよく」

碧「なに、過労死しろつて？ご自分とこのマネージャーに頼めばいいんじゃない？！」

黒尾「そーいや青城のマネいねーな。」

及川「新人だからまだ慣れてなくて俺らがやつてるんだよく」

碧「あんだその使えないゴミは！」

記録表に殴り書きして隅に置いておく。(投げる)

多分これあたしにしか読めねーよな。

ちやんと選手が見れるように綺麗にまとめてあるノートもあるけどね!?

木兔「碧って青城マネ嫌いだよな」

碧「野生の勘かよ。おー嫌いだ。言うなれば嫌悪感。

アイツの顔を見れば見るほどむしさんが走る！」

澤村「その流れまだ続いてたんだな」

黒尾「確かにいい感じはしないよな。かと言って悪いわけでもない。」

碧「そこが嫌なの。女の勘？ざわざわして気色悪い…」

木兎「碧って口悪いよな！」

碧「あたし木兎のそういう所嫌い」

木兎「でも怒った顔しても美人なのなく」

碧「あたし木兎のそういう所好きよ」

及川「鮮やかな手の平ドリルだね」

大山「……ツギリ……月城碧……ツ!!」

16話 『私の』『あたしは』

大山 side

何なのよ何なのよ何なのよ!!

あの女!!私の居場所を奪って!!

皆に囲まれて楽しくお喋りするポジションは私のなの!!

会った時から嫌いだったわ!

あの見透かしたような目がイライラした!

ちよつと顔が良いからって調子に乗ってるわ!

私の方が気も利くし暴言なんて吐かないし完璧なのに!

皆あの顔に騙されてるんだわ!

自分の顔の良さを利用して皆を操ってるんだわ!!

さつきだつて主将たちを陥れてた!

徹に飽き足らず他の選手も陥れるつもりよ!

きつとそうよ!このままじゃいけないわ!

私が皆を救ってあげないと!

大山「もしもし。パパ？ お願いがあるの」
見てなさい。月城碧……！

アంతを地獄の底に突き落としてやるんだから!!

碧 s i d e

夏とはいえ汗をかいた状態にいるのは寒くなる。

着替えようと更衣室に行き服を脱ぐ。

更衣室には誰もいなく、静かな空間だ。

碧「10年か……」

家族がいなくなつて10年。何も変わらず生きてきた。

変わったのはお父さんとお母さんがいないこと。

それ以外は何も変わらなかつたのに、10年経つた今、変わり始めた。

碧「あたしとあなた どこで出会つたのかしら……もう覚えていないけど 過ごした

日々は 忘れない」

またあの唄を口ずさむ。

もー何なんだよ！途切れ途切れで覚えてないし！

イラツとする！

気合いで思い出せ碧！！

碧「ずっと遠く何も分からなくなっても あの笑顔が映る水面《みなも》は 忘れはしない」

ここまでは覚えてる。よしよし…次からだ。思い出せ！！

碧「おはよう 遊びましょ また明日ね そんな約束して 一緒にお家へ帰ろう」

あ……きた。

碧「そんな約束 とうに無いのに」

思い出した……あの唄…

あたしが作ったんだ。クロと研磨の為に作って、聴かせて、3人でもっと考えて…最後は引越すことになって…唄えなかった…。

碧「そうだ…約束なんて、もう無いんだ…」

あたし達は形は幼馴染だけど、中身はもう、あたしは要らない存在だ。

クロと研磨には2人の過ごししてきた時間がある。あたしがそれを邪魔しちやいけな
い。

10年経ったんだ。あの事故のことを乗り越えたんなら、

この関係も乗り越えなきゃいけない。

あたしは変わった。10年前とは違う。それはクロと研磨も同じ。

3人手を繋いでたのをあたしが離れた。

それなのに10年ぶりに再会して

幼馴染という関係に縋りついたあたしはなんて弱いのか。

10年前と何にも変わってない。

なら、今度こそ変わろう。

歯車がやっと回り始めた。

さあ、…運命に向かって歩け。

17話 殺る気

研磨 side

着替えから戻ってきた碧はちよつと変だった。

笑顔がいつもみたいに心の底から笑ってない。

貼り付けたような笑顔。

多分俺とクロにしか分からないと思う。

及川「碧何かあった？」

碧「なに急に怖いんですけどw」

及川「いや、笑いがぶちやいくになったなーって」

碧「処す。」

オイカワさんも気づいてる……？

碧は昔から嫌なことは我慢する。無言で歯を食いしばって、むっとしてる。

昔は分かりやすかったけど…今は成長して”隠し方”を知ったから

ちよつと分かりにくくなった……

大山「碧ちやくん！さっきそこで男の人からお手紙貰ったんだけど、…」

碧「手紙……?」

荻野「ユースのファンの人からじゃないですか?」

碧「合宿なんて知らないのに?」

今川「過激派とかじゃないの……?」

碧「怖えこと言うなっつ。 ビッ い”ッ…!」

ボタタ……っ、

及川「碧!!」

今川「荻野救急箱……!」

荻野「は、はい!」

研磨「血は少ないからすぐ止まると思うけど……何入ってたの?」

及川「これ……カミソリだ。」

碧「いや古典的かよ!」

誰がこんなこと……いや、1人しかいないよね…

研磨「これ誰から貰ったの?どんな顔だった?それくらい覚えてるよね」

大山「え、えつと……ま、マスクとサングラスでよく分からなかったな…」

研磨「そんな如何にも怪しい人から貰ったもの平気で渡すんだ。」

そもそも他人が勝手に高校に入れるわけないよね、」

大山「わ、私が外に出たから……」

研磨「外に出なきや行けないことなんてないよね

スポドリ作るなら水道だし、ビブスとかは倉庫だし、」

大山「か、買い出しがあつて……」

研磨「オイカワさん、今青城に足りないものつてあるの……?」

及川「え、いや、ないと思うけど……」

研磨「納得行かないなら何が足りなかったのか言つてみてよ

確認するから。」

大山「そ、そんな私が犯人みたい……」

研磨「逆にこんなに状況証拠あつて疑わない方がおかしいでしょ。」

碧「け、研磨くん? 研磨「碧は黙つて……」ハイ。」

大山「わ、私は違うわ!そ、それに孤爪くんどうしてそんなに犯人を探そうとするの

?

幸い碧ちゃんは軽傷で済んだんだよ?心配とか……」

研磨「碧はおれとクロの幼馴染だから。怒つたつて不思議じゃないでしょ……

クロが聞いたらもつと犯人探しが大きくなるんじゃない……?

おれよりも怒ると思うよ……?」

碧「(想像した)チ——(わーわー)——ン」

及川「(孤爪くん…怖っ)」

今川「(敵に回しちやいけないタイプ…)」

碧「ま、まあ、そんな大事にしなくても！

大丈夫だつて、な？」

研磨「……………(むすっ)」

碧「可愛い♡」

研磨「碧うざい…」

碧(そつちがその気なら容赦しねえぞ)

大山(月城碧…ッ、必ず地獄におとす！)

18話 本格的に

碧 side

研磨を宥めてクロたちの所へ行かす。

指はバレないように絆創膏の上からテーピングをした。

及川も袖季も戻ってもらい、この場にはあたしと大山の2人。

碧「よくもまあ、一応選手の手なんだけど？」

大山「碧ちゃんまで私を疑うの？」

碧「その名前呼びやめてくんね？吐き気しかしねえから。」

あたしはお前が大嫌い。お前もだろ？」

大山「……つち、アンタのその目ホントうざいわ」

碧「お前の存在もうぜえよ？」

大山「待つてなさい、必ずアンタを地獄におとしてやるから」

碧「やってみろよクズ女」

黒尾 side

黒尾「どーした研磨、むすつとして」

研磨「別に」

研磨の様子がおかしいと思ったら

戻ってきた碧の様子もおかしかった。

眉間に皺を寄せて舌打ちしてる。スケ番かよ。

黒尾「？おい碧、お前その手どーした。テーピングなんてしてなかったろ」

碧「あー、突き指防止的な？」

黒尾「ふーん……」

碧「あたしアツチにいるから、何かあつたら呼んで。」

黒尾「おー」

そう言つて指導を再開する碧は俺と1度も目を合わせなかった。

なんかあつたのか……？

リエーフ「クロさーん！試合しましょー！」

黒尾「今行く」

碧 side

ずっと考えても分からない。

あたしと大山が会ったのは今日が初めて。

だから手紙やカミソリを用意する暇なんて無かったはず。

けどアイツがやったのは確か。じゃあ他に誰がやったんだ…？

碧「そこ！レシーブ乱れてんぞ！」

この合宿に来てる誰か…？

でもそんなのは信じたくないし初対面ばっかだ。

本庄「碧、休憩。」

碧「おー」

体育館の端によけてタオルで顔を拭く。

夏はスポドリを取りに行き、隣では柚季がダルそうに立っている。

コイツいつも眠そうなんだよな…

今川「もー疲れた。休みたい」

碧「飯何にしようか」

今川「眠い」

碧「会話が成り立たねえ」

それにしても今日は暑い。

ジリジリと音が聞こえるほどの暑さで恨めしく外を見る。

碧「……?」

人「? 顔見えねえな…」

なんだ、不審者か? 男だらけのココに?

碧「!!伏せる袖季!!」がっ

今川「!?!」

バリイイン!!

夜久「なんだ!?!」

碧「い、ツてく…、大丈夫か袖季」

今川「碧先輩…!血…」

外にいた奴はコツチに向かつて石を投げてきた。

そして袖季を庇った時に割れたガラスをもろに食らった。

顔にはいくつか傷があると思う。

碧「大丈夫大丈夫。お前に怪我がなくて良かったよ。」

これでハッキリした。

大山は自分でやってんじゃない。誰かにやらせてんだ。

マジでクズじゃねえか…

黒尾「碧!! 顔見せろ!!」ばっ

碧「近っ!?!」

黒尾「誰にやられた!」

碧「顔見えなかつたし! 耳元で怒鳴るな!」

リエーフ「え!?! これ事故とかじゃないんすか!」

黒尾「バカかお前は。ポルターガイストじゃあるまいし。

それにそこに石あんだろ。投げてきた証拠だつつの。」

碧「言つとくけど大事にしなくていいから」

黒尾「お前怪我したんだぞ? おばさんとおじさんだつて心配すんだろ!」

碧「……かすり傷だから。ホントに平気。お母さん達にはあたしから連絡しとくから。」

黒尾「……ちゃんと手当するな?」

碧「します!」

黒尾「…分かつた」

大山愛菜「…ここまでとはな。」

あたしだけに攻撃してくんならまだしも他人も巻き込みやがつて…ッ

『碧……ごめん、ね……』

碧「ギリッ……」

もう、誰も傷つけさせない。
こっちだって、反撃だ。

19話 どうする

碧side

……反撃つつつたけど何する!?

やり返したい所だけどクズにはなりたくない!

そもそもにしてあたし今やられっぱなしすぎね?

解せぬ(☒・ω・☒)。o?

清水「碧ちゃん、人参切れた?」

碧「あ、うん!はい!」

清水「ありがと」

あ、今飯作り中です☆

今日の夜飯はカレー!ありきたりだけどな!

谷地「1センチ、いえ1ミリの狂いもなく切らなければ……!」

白福「大丈夫だよ、お腹に入れば同じだから」

碧「じゃあもう野菜丸ごと入れるか。」

雀田「木兎なら食うね。」

カレー作りと食器準備にわかれて作業する。

もちろんあたしと大山は別ですよ??

雀田「碧ちゃん顔の傷大丈夫?」

碧「大丈夫大丈夫! 大したことないから!」

谷地「碧さんですら暗殺されかかるなんて…」

私なんてフアンの方に細切れにされるのでは…!?!」

碧「フアン怖すぎww」

正直こーゆー過激なフアンも確かにいるから

そいつならどれだけ良かったことか…。

待つてろよ大山、必ずあたしはお前に制裁をくわえてやるからな。

大山 side

あんなんじや全然ダメよ!

もつとアイツが絶望するようなことじやなきや!!

大山「ちよつとお手洗い行ってきますね?」

パパに頼まなきや…!!

パパは凄いんだから! 警察の上の立場の人でいつでも私を守ってくれるのよ!

今までだってそうだったわ!!

大山「パパ? 月城碧について調べて!」

すぐに調べた結果が送られてくる。

…へえ、あいつ親くないのね。

ふふ、次にどうするか決まったわ…

研磨 side

碧は大事にしなくていいって言ったけどあそこまでやられたらクロに報告するしかないと思う。

音駒のみんなにも話してあとは青城かな…

まずは外堀を埋めて確実に追い詰めるようにしないと…

研磨「クロ…」

黒尾「ん?」

研磨「実は… 白福「ご飯だよ」後ででいい。」

黒尾「?おー。」

碧…約束やぶっちゃうけど、今回は仕方ないよね…

碧 side

碧「はい皆大盛りー？」

木兎「俺メガ盛りー！」

碧「ございませーん」

影山「温玉……」

碧「及川買ってこい」

及川「さつきとの扱いの差！てゆうか何でオレが飛雄ちゃんの為に買ってこなきゃいけないのさ！」

どんだん盛って皆均等になるようにする。

さすがあたし。施設じゃ皆の世話してたからなア……。

なつかし……。

日向「碧さんって凄いですね！なんでも魔法みたいにパツ！ってこなして！」

碧「いや、そんなこと 大山「碧ちゃんはやっぱ違うね！」 大山……」

大山「だって碧ちゃんお母さんとお父さん事故で亡くしちゃってずっと施設育ちだったんでしょ？」

下の子のお世話とかしてたの？」

碧「なッ……」

黒尾「どういう事だ、それ……」

20話 壊れてく

及川 side

やっぱり今までのことは大山ちゃんの仕事だつて確信した。

碧は自分の過去を他人にそんな簡単に話さない。

俺たちだつて1年たつてようやく聞けた過去だつたし。

研磨「おばさんとおじさんが事故つて……本当……？碧……」

黒尾「何で言わなかつたんだよ……!？」

大山「不運な事故だつたらしいよね……」

お父さんは即死でお母さんは碧ちゃん庇つて死んじやつたんだものね……」

碧「ツ、るさい……」

大山「引越しの最中だつたんでしょ？」

碧「黙れ……ッ」

大山「ホント、可哀想だつたね、碧ちゃん……」

碧「うるさい黙れ!!」がっ!!

大山「きや!？」

碧は大山ちゃん胸ぐらを片手で掴んだ。

その目は血走っていた。

碧「さつきから人の過去をベラベラと…!!

どこから知ったか知らねえがテメエなんかあたしの親の話すんな!!

あたしは可哀想じゃない!!」

黒尾「やめろ碧!」

碧「離せ触んな!!何であたしのことテメエにとやかく言われなきやいけねえんだよ!

お前が誰かにやらせたんだろ!!手紙に入ってたカミソリもガラス割ったのも!

柚季に当たってたらどう責任とんだよ!!テメエは… パンツ! つ、…!?!」

黒尾「いい加減にしろ、碧…!」

碧の白い頬を叩いたのはクロ君だった。

これ俺の勘だけど…今この状態でクロ君が殴つちやヤバいことになるんじゃないや…

ああ、まずい。皆の不信な目が碧に向いてしまう。

碧自身だって今周りが見えてない…!

大山「わ、私なにもしてないのに…:…つ」

そう言つてクロ君の後ろに隠れる大山ちゃん。

これは完全に仲を引き裂きに来てる。

碧「お前みたいな奴があたしの何知ってんだよ!!」

黒尾「やめろ碧!! 大山さんに謝れ!」

研磨「ちよ、クロ…」

あ、…これはダメだ。

碧「…：謝る? あたしが? なんで?」

何も知らないクロが急に入ってきて謝れとか意味分かんないんですけど」

黒尾「胸ぐら掴んであたしは悪くありませんっつか? 冷静になれよ

っつか何も知らないって、お前が教えないんだろ?」

及川「ストーツプ。ここは及川さんが仲裁に入るからね。碧のことは全部知ってるから。」

冷静になるのはクロ君もでしょ。碧は一旦俺が連れてくから。行くよ、碧。

それと青城の皆も一緒にいいね?」

碧「…：ココリ」

本庄「私達も行くわ。知ってるからね。」

及川「分かった。とりあえず、別々にご飯にしようか。」

青城とユース組は今日他に行こう。」

今回は大山が仕掛けてきたことでアイツは加害者だけど、

碧も胸ぐらを掴んだりして加害者同様。

どっちが悪いとかはつけられない。

だからこそ他の人の価値観による。

今この場から離れるのは正直危険だと思う。

大山が残ってる人にあることないことを言っただけ思うように動かしそうだから。

でも……

碧「……ッ、」

碧の今の顔を見たら先に優先すべきはコッチだと思った。

クロ君……幼馴染とはいえ、碧を傷つけるのは許さないよ……？

21話 優しさ

碧 side

まさかクロに殴られるなんて思ってもみなかった。

クロの中ではあたしは完全に加害者。

今はもう幼馴染っていう形すら保てないに等しいと思う。

及川「碧、ご飯食べれる？」

碧「……いらない」

本庄「碧……」

及川「(連れてきたは良いけど皆過去を知ってるからこそ何も言えないんだよな……

誰か碧を救える人がいれば……)」

コンコンツ

岩泉「誰だ？」

及川「さあ……? はーい！」

ガチャ

影山「あ、あの……」

及川「何で飛雄ちゃんがいんのさ。」

影山「あの…碧さんの、顔、つか、目が、昔の俺と似てて…。

中学時代の俺と…。苦しそうで、辛そうで…」

及川 岩泉 国見 金田一「！！！！」

碧「…：影山くんは何か辛いことがあったの？」

影山君のことは他の人から聞いた。『コート上の王様』って呼ばれてたらしい。

きつといい意味じゃないのは分かった。

理由を聞けば、眉間に皺が寄った。

それをこの場で言わそうとするなんて、あたしはつくづく最低だな。

だからごめんね、聞かない方が良かったね、そう言おうとした。

影山「…俺の自己中はトスのせいで、皆に迷惑かけて、楽しくないバレーをさせました。」

碧「え……」

影山「でも、金田一が、謝らなって言ってくれました。」

金田一「！」

影山「俺も謝んねえ、つて。辛いことはあったけど、今こうして話せるし、

俺にも金田一達にも、仲間がいます。碧さんにも、いるんじゃないですか？」

碧「影山君は……強いね。」

影山「？あざす、」

碧「影山君の過去を話してもらったんだからあたしも話さないとフェアじゃないね。」
あたしは自分の過去を話した。

今までは思い出すことさえ辛かったのに、今は何故か躊躇なく話せた。

及川「(碧の表情が柔らかくなってる…) まったく、バカの力は偉大だね。」

影山「及川さん、サーブ教えてください」

及川「何で今の流れでそうなるんだよ！嫌だね！教えなーい!!」

碧「ケチめ」

岩泉「ケチ川だな。」

及川「新たなあだ名作らないでよ!!」

碧「影山君ここでご飯食べてかない？及川の恥ずかしい話とかないの？」

影山「んぬ、……」

及川「ちよつと碧!?!飛雄も考えなくていーから!!」

てゆーか及川さんのことだったら岩ちゃんが一番知ってんだからね！

俺ら阿咩とか呼ばれてるし！ね！岩ちゃん！

岩泉「記憶にねえな。」

及川「岩ちゃん!？」

そんなたわいのない話をしながら、あたしも少しカレーを食べた。
そんな中及川が言った。

及川「クロ君たちのこと、諦めちゃダメだよ?」

碧「…?うん、」

及川「(分かってんのかな…)」

22話 コミュ障とエスパ―

碧side

合宿2日目、あたしが顔を出すと空気が重くなつた。

まあそりやそうですよね……

クロに関しては目も合わない。

幼馴染の関係は終わらなきゃいけないんだから良いんだけどさ……。

研磨と楽しく過ごしてるなら文句はないですけど……

一応マネージャーだからそれなりの仕事はするよ!?

全部フル無視つてどういう事だよ!!!

何言つても

『海に聞いてくれ』とか、『夜久に頼め』とかさ!

おめー主将じゃねーのかよ!! : (# . ω .) : イラッ

碧「皆もそれとなく避けるし……」

赤葦「あの、……」ほん、

碧「(. ㄥ .) <キエエエエエエエエエエ」

赤葦「ビクッ」

碧「あ、ごめん引かないで驚いただけだから！」

赤葦「あ：俺も急に声掛けちやっただ。」

碧「いやいや！あたしがボケっとしてたからさ！何か用？」

あ、テーピング？いいよ、こっち来て」

赤葦「え、：何で分かったんですか？」

碧「あたしに声掛けた時左手でぼん、ってやったでしょ？」

プレー見てたら右利きだったからさ。突き指でもして左手で

それ庇ってたんじゃないかと思つて。外れてたら笑いもんだけどね！」

赤葦「いえ、あつてます。凄いですね。」

碧「あたし探偵出来るんじゃない？」

馬鹿なこと言いながらテーピングを巻いてると

ふ、と笑う声が聞こえた。

赤葦「すみません：、ふふ、探偵：バレー専門のですか？」

碧「バレー専門の探偵とか史上初じゃね？あたしギネスのれるね。

あたしホームズやるからワトソンやってくれない？」

赤葦「碧さんってそういうの知ってるんですね」

碧「あれ、デイスられた？ シャーロック・ホームズくらいは知ってるよ！

あれでしょ？ ペろっ、こ、これは青酸カリ！ ってやつ」

赤葦「それは小さくなっても頭脳は同じの方ですね。」

碧「バレたか。」

…はい出来た。ていうか今のこの状況下であたしに話しかけてくるなんて勇者だね。」

赤葦「何も悪くない人に話かけちゃいけないですか？」

碧「え…」

赤葦「胸ぐら掴んだことを除けば原因は大山だと思ったので。」

碧「あ、ありがとう？」

赤葦「俺は赤葦京治です。」

碧「あ、月城碧でございます。ご丁寧にどうも。↑」

赤葦くん礼儀正しい子だな、

木兎よりいいんじゃないの？

影山「碧さん！…と、梟谷の…」

あ、そう言えばこの2人セッターだっけ。

セッター同士の話しとかしたいかな、あたしはお暇しようかな…

影山「(セッターいつからやってますかコツとかありますか

壁に当たったことはありますか…)」

あ、ダメだ影山くんコミュ障？

ここはあたしが…

赤葦「セッターはけっこう前から…」

答えられんのかーい!!

何赤葦くん怖いんだけどエスパー!?

赤葦「いえ、人間です」

碧「いやああ!心読まれたああ!!」

大山「ツチ、懲りない女ね…!」

23話 歪んでく

本庄 side

あの大山とかいう奴、どれだけ碧を苦しめたら気が済むのよ！

それに音駒だつて！碧を信じてあげるところか避けてるつてなによ！

混乱する気持ちは分かるけど信じてあげなきや碧がもつと追い詰められるのに！

こうなつたら直談判よ……！そう思つて体育館の隅にいる大山に声をかけた

本庄「大山さん！」

大山「えつと、……ユースの本庄さん？」

本庄「碧への嫌がらせ、やめてくれない？」

大山「……何のこと？」

本庄「とぼけないでよね！昨日夕ご飯で皆に何吹き込んだか知らないけど

碧をこれ以上を苦しめないでよ！」

大山「ど、どうして証拠もないのにそんなこと言うんですか……？」

本庄「証拠？じゃあアンタがやってない証拠はあるわけ？」

大山「……うるっさいわね、痛い目みたくなかつたら首突つ込まないでくれる？」

本庄「碧のことを好き勝手言つて……！碧がアンタになんかしたわけ！？」

アンタが勝手に嫌つて嫌がらせしてるだけでしょ！

碧はアンタより価値のある人間だわ！ガラスが割れた時腕や足にささつて

バレーが

出来なくなつたらどうするつもりだったのよ！碧は女子ユースの主将なの

よ！？」

大山「知らないわよそんなこと！アイツは皆を騙してるのよ！」

本庄「話にならないわ、皆にも話すし、監督にも話すわ。」

大山「誰も信じてくれないわよ！」

本庄「信じてくれるまで話すわ。証拠だつて探してやる。」

大山「ツ、調子に乗らないでよね!!」どんっ！

本庄「っ、いつ……!?!」（足捻つた……っ）

転んだ音がしたのか皆寄つてくる。

これ、結構痛いわね……っ、

春風「本庄先輩！どうしたんですか!?!（キッ！）またアンタ!?!」

大山「ち、違います！私仕事してたら急に本庄さんが、つかみかかつて来て……!?!」

この女……っ、どこまでもシラを切るのね！

なんて奴なの…!?

今川「それで…? 掴みかかってきたから私は正当防衛…? 随分頭悪いんだね、

マネージャーの癖して選手の手当もないの? そもそも本庄先輩が理由もな
く人に

掴みかかるわけないでしょ…そんなの碧先輩にくらいだから」

碧「え、柚季ちゃん?」↑本庄手当中

今川「碧先輩に本庄先輩、2人のコース選手にケガさせたわけだけど…どう責任と
んの?」

ゆ、柚季が怒ってる…め、珍しい。

ていうか何で私が理由もなく掴みかかるのが碧だけって分かるのよ↑

大山「ほ、本庄さんは私の事が気に入らないからって…」

今川「さつきと言ってること違うよね、数分前の記憶すら曖昧なの…?

それマネージャーに向いてないよ。」

大山「ひ、酷いよ……」

碧「…あのさあ、今回のことはどんなに言い合ったって

どっちが悪いとか分かんないんだからやめない? 夏もそれでいいだろ?」

本庄「……ええ。」

黒尾「じゃあこれを機にお前は大山さんに謝れば？」

碧「…まだその話？あたしは一切悪くないから。」

そもそも何なの？あたしの過去教えないとか教えるとか言ってつけどさア、そっちだつて聞かなかつたじゃん。聞かれてもないことベラベラ喋るほどオーブンな性格じゃないんだよね。」

黒尾「幼馴染なんだから教えようとか思わなかつたわけ？」

碧「幼馴染だからつて何でも教えなきゃつて？」

夢にまで出てくるほどのトラウマをわざわざ思い出して言うのが幼馴染？」

黒尾「こつちが10年間どんな思いでいたかなんて知らねーだろ!!」

碧「それはそっちも同じでしょ!?!いつまで過去にすがり付いてんだよ！」

10年経つたあたし達はもう、幼馴染なんかじゃない!!」

黒尾「……ッ、そうかよ、分かつた。俺たちはもう縁も何もないただの他人だ。」

研磨「く、クロ……」

及川「(碧のバカ……っ、たくもう……やつば意味分かつてなかつたし……)」

碧「及川、青城と音駒のマネ交換でいいよな。」

大山が音駒、あたしが青城。」

黒尾「及川の許可とるまでもねーよ。願つてもねえことだわ。」

大山「……フフ、」

24話 後悔

黒尾 side

俺は最低だと思つた。

大山さんが碧の過去を話した時、本来なら大山さんを注意すべきだった。

誰だつて自分の過去を簡単に話されたらムカつく。

けど俺はそれよりも碧が俺と研磨に教えてくれなかつたにムカついてしまった。

何で言つてくれなかつたのか。そんなに、俺は頼りないか。

そんな思いが先走つてアイツを殴ってしまった。

あの時の碧のが思ったことは顔を見ただけで分かつた。

『どうして叩いたの、どうしてクロが。』

殴る前までは幼馴染としての信用、信頼はまだあつた。

それを壊したのは、俺だ。

けど自分が思つた以上に感情は止められなくて碧を責めた。2回も。

俺は知らないのに及川や他の奴は知ってる。それがどうしようもなく腹が立つた。

研磨「クロは最低だよ」

黒尾「分かってる、」

研磨「分かってない：碧に酷いこと言ったのを最低って言ってるんじゃないよ
信じてあげなかったことに最低って言ってるんだよ」

俺は研磨の言っていることがよく分からなくて

研磨を凝視した。

研磨「クロは幼馴染なら教えてくれれば、って言ったよね、

じゃあ、幼馴染なら何で先に信じてあげなかったの：？覚えてない？

小さい頃にケンカとかあったら碧は話を聞かないでも

おれ達の味方してくれたよね。おれ達が間違ってたなら、一緒に謝ってくれた

よね……」

黒尾「……俺は、ホント……最低だな。」

俺は自分のことばかりで碧のこと何一つ見ていなかったし、信じてなかった。

こんなんで、なにが幼馴染だよ……

研磨「10年経って……確かに変わったことはいっぱいあったけど、

友達なのは変わらない、って、おれは思う……」

黒尾「ああ。……ありがとな、研磨。碧んとこ行ってくるわ。」

研磨「待って、そのことなんだけど……」

俺は大山が碧に何をしてきたのかを知った。

俺は最低な上にバカだな…。

研磨「大山は確実に逃げ場がなくなるまで待つて。」

黒尾「研磨お前…怒ってん、のか？」

研磨「…友達なんだから、当たり前でしょ…」

黒尾「…ははっ、」

研磨「なんかオカシイわけ？」

黒尾「いや、何でもねえよ。じゃあ、俺たちのお姫様取り返しますか。」

及川「ちよーつと待ったー！それ！及川さんも参加するからね！」

黒尾「堂々と盗み聞きですかオイカーくん。」

及川「人間が悪いな！及川さん一応情報はあるんだからね！」

碧の味方は青城、ユース、クロ君、研磨君、飛雄、後は…赤葦くんかな。」

研磨「…：鳥野を優先的に味方につけたいかな」

黒尾「何でだ？」

研磨「あそこは頭がきれる人がいるでしょ…：背の高い。」

黒尾「ああ、ツツキーか。」

及川「飛雄もこっち側だからね。話しやすいと思うよ。」

さーむら君も多分碧より大山を疑つてゐるはずだからね」
黒尾「んじやあ、まずは外堀を埋めていきますか。」

こっからが反撃だ、待つてろ碧。必ず助けっからな。

25話 リセット

月島 side

黒尾さんから話があるって言われたから来てみたら…何この組み合わせ

青城、ユース、烏野、音駒…それに赤葦さん。

黒尾「よーツツキー。遅かったじゃねーの」

月島「なんですかこの集まり。」

及川「碧を救おうの会☆」

月島「碧…? ああ、あの青城のマネに嫌がらせされてる人ですか。」

黒尾「飲み込みはやーい。で、碧にこれ渡して欲しいんだよね。」

大山にはバレないように。」

月島「なんで僕が…」

赤葦「大山に勘づかれたくないからね。よろしく。」

月島「…:…はあ、分かりました。」

あの胡散臭い笑顔向けてくる青城のマナージャーより

碧さんの方がまだ表裏がないしね…

碧 side

合宿3日目、昨日と何も変わらな

ついか色んな人に避けられ始めた。え、これ新手的イジメだよな？

月島「タオル貰えますか。」

碧「ああ、はいどうぞ。」すっ

サツと顔を拭いたかと思えばすぐ返して行つてつた。

何だったんだ… カサっ ん？紙？

あおのぼーか

わすれものぼっかりしてたお転婆

せいせきはいつも国語だけでもう少

ろうか走つて怒られてたやーい

なきむし

けむしーうえーい

……あん？（　　？　　）

え、なにこれ、は??ホントイジメだよね?

黒尾「ホント、お前もーマネやめれば?」

碧「は?」

及川「俺らのマネージャーに酷いことするなら許さないけど?」

碧「………な、何で……?ついこの前まで味方だったじゃん、何で皆アイツの味方するの?」

あたし何もしてないじゃん……!」

本庄「大山さんに私を突き飛ばすように言ったのもあんたでしょ?」

碧「ち、違う!!何で信じてくれないの……つう、つ……」

赤葦「泣けばいいと思ってるんですかね。」

大山「み、皆やめて?私は皆が分かってくれたならいいの!」

誰だって、嫉妬とかはあるでしょ?碧ちゃんだってちよつと間違っただけよ

!」

碧「違う!そいつが嘘ついてるのよ!あたしはやってない!」

大山「碧ちゃん!自分の罪を認めなきや人は変われないんだよ!」

前を向かなきゃ!!皆に迷惑かけて恥ずかしくないの!」

碧「つうるさいうるさい!!」ダッ

黒尾「待て!!」

大山「追わなくていいよ黒尾君! 碧ちゃんをこれ以上追い詰めたら可哀想よ!

つて…行っちゃった…。でも良かった! 皆が目を覚ましてくれて!

でも碧ちゃんが可哀想に思えてきたわ。」

国見「俺たちを騙してたんだから当然の報いですよ」

大山「…そうね!」

本庄「もうあんな奴の事は忘れて練習しましょう!

私たちがきっちり見てあげるわ!」

大山「あはは、皆頑張つてね〜!」

大山 side

いい気味ね、私の居場所を取ろうとした罰よ。

もうここにはいられないわね。

でも大丈夫よ。全部リセットされた。

皆のヒロインになった私が、手を差し伸べてあげる…

26話 国語は出来ない廊下走って泣き虫毛虫

碧 side

碧「はア、はア……」

渡り廊下まで全力で走って、

息を整えるために肩で息をする。

黒尾「テメエ……早すぎなんだよ！」

碧「何で追いかけてくんだよ！もう他人なんだろう!？」

黒尾「それでも友達なのは変わんねーだろ！」

碧「……なにそれ、矛盾だよ」

黒尾「悪かった…何も知らずに勝手に解釈して、お前を責めた。」

碧「……痛かった」

黒尾「ごめん」

碧「悲しかった」

黒尾「ごめん」

碧「酷いこと言って、ごめんね……」

黒尾「俺もごめんな、碧……」

数秒間の沈黙が流れる。

……あれ、そう言えば……

碧「テムエドンだけあたしの悪口書くんだよ!!」

黒尾「いやムード!!仕方ねーだろ!?それでしか書けなかったんだよ!」

碧「頭文字とって『合わせる泣け』ってのは簡単に分かったよ!

国語だけでもう少しで廊下走って泣き虫毛虫ってなあ!難しいんだよ!」

クロが言いたかったのは、大山に何を言われても泣け、

言い返すなって意味。だから国語だけでもう少し。

泣き虫はそのまま泣く。

毛虫は森然の渡り廊下。森然は山道が多くて虫も多い。

毛虫がいるのは多くは木の近くとか。

高校の学校内で人に見つからなく、木があるのは渡り廊下くらい。

それに加えて廊下走って怒られてたって、決定的。

黒尾「お前なら分かると思ってたよ。」

碧「碧様だろ。当然だわ。↑」

黒尾「おばさん達のこと…教えてくれるか?」

碧「……………うん。」

黒尾「碧…」

碧「研磨来たらね！」

黒尾「アツハイ」

碧「これからどうすんの？あたしはとんでもない悪者になっちゃったけど。」

黒尾「研磨が言うにはな、碧がもう一度俺らを手玉にとつて 碧「What？」大山
がまた

仕掛けてきたところを録画と録音で証拠を抑える、と感じた。

だから碧にはもう少し頑張ってもらわなきゃなんねえ…」

碧「いや、頑張るのはいいんだけどさ、手玉にとるつてなに!？」

黒尾「女王政権的な」

碧「一度もした覚えはないですけどー!？」

研磨「碧……………」ぎゅ、

碧「わつ、研磨く！」ぎゅううう

研磨「う…苦しい」

碧「あ、ごめんごめん。」

3人だけになったのは

合宿が始まる前のバスに乗ってた時かな：

研磨も来て、あたしは事故のことを話した。：唄のことも。

黒尾「おばさん達は残念だったけど……お前が無事でよかった……」

研磨「ねえ、……その唄さ、確か一緒に家へ帰ろうで終わってなかった……？」

黒尾「確かに……3人で作った時はそれで終わってたな」

碧「え、嘘……」

黒尾「お前が何も言わずに引越した後、俺と研磨で続き考えたよな」

研磨「うん……」

黒尾 研磨「約束なんてしなくても いつかまた会える だってほら 手が届くか

ら」

あれはあたしが勝手に作った歌詞だったんだ……。

2人の手がそつとあたしの手を包んで笑う。

10年前と重なる。あの日はジリジリと暑い日だった。

今は、風が吹く。優しく包むように。

黒尾 研磨「一緒に遊ぼう！」

一縷の雨があたしの頬を伝う。

確かに10年前とは違う。変わらなきやいけないと思った、でも、

それは違ったんだ。10年経とうがなんだろうが、2人が好きならこう言えばよかった。

碧「うん……！遊ぼう！」

27話 運命

碧side

クロ達との話が終わって自分のマネ部屋にもどる。

実は今まで空気が気まずいから今までは他の教室でぼつちで寝てたけど……↑
さ、寂しい……っ、でも作戦上まだぼつちで寝るしかないんだよ

清水「碧ちゃん、」

碧「潔子ちやあ……あー、清水、さんに他のみんなも……」

清水「私たち、碧ちゃんの味方だから」

皆真剣な顔してこつちを見ていて、

思わず涙腺崩壊した↑

雀田「泣かないでよ……！」

碧「ううう……皆ありがとねえ……」

白福「私たちだけでも碧ちゃんの味方したらダメかなあ……？」

碧「だ、ダメだよ！大山は他の人まで巻き込む奴だから

もし怪我なんかしたら大変だろ！」

雀田「友達が1人で苦しむ方が辛いよ！」

碧「(ドパンツ)(2度目の涙腺崩壊)」

谷地「あ、碧さんは私が身代わりになってでもお助けするので！」

黒尾「碧、…と、他のマネちゃん達も」

清水「私たち、碧ちゃんの味方する事にしたから」

黒尾「…そっか、女は強えからな！碧のこと、頼むわ(ニツ)

で、碧。ちよつと買い出し頼みてえんだが…」

碧「いいよ。」

クロに頼まれたのはテープिंगとコールドスプレー

それと…録音機。

いや市販で売ってんの？

探してみますけど…。

つーか全部をスマホで良くね？保険？

ぐく外あつつく…

パパッと買ってビュンツて帰ろく

碧「てれてれてれてて、てっててててれ」↑

え、何かって？はじめて○おつかいのテーマだよ。

信号が青になったからお手あげて渡りましょ↑
ブオン

碧「ぎゃー?!?!」ズデッ

な、何この車！何そんな急いでるわけ!?

真っ黒でカッケー…って違くて!

危うくお母さん達のとこに逝くとこだったんですけど!?

「す、すみません！大丈夫ですか!?!」

碧「男前なんで許します。」

マジでタイプ♡とかじゃないけどマジ男前。

白すぎない肌にスラツと高い背。

髪は真っ黒でも一ヶ所だけメツシユなのか白い。

「僕は大山裕司と言います。お怪我はありませんか?」

碧「お、大山……?」(「。口。」)

裕司「……あ、…月城碧さん、ですか……?」

碧「あー、はい。……非常に嫌な予感がしますが、…大山愛菜、サン、の……?」

裕司「一応…父親です」

碧「一応……?」

裕司「ここじゃなんですので近くのお店に行きませんか？お詫びもしたので」
碧「い、いえいえそんなお詫びなんて。」

でもお話は聞きたいので……。」

裕司「じゃあ乗ってください。」

碧「え、こんな薄汚い娘がそんなオシャンテイな車乗っていいんすか↑」

裕司「はは、面白いことを言うんだね。」

笑った顔もまたお美しい……

どんだけ男前になれば気が済むんだこのおじ様。

そしてあたしは車に乗ってから思った。

知らない人にかつてに着いてっちやダメじゃね？

まあいつか↑

碧「車の助手席とか愛人感ありますね↑」

裕司「反応に困るなあ……」（苦笑）

28話 親子

碧 side

さらつと言うからそこら辺のカフェとかだと思つたら

意外にお高そうな店だった……え、あたし今ジャージなんだけど……

裕司「僕は警察で働いていてね」

碧「警察!? お偉いさんですか!」

裕司「はは、簡単に言うとなんなのかな。」

僕は婿養子なんだ。」

碧「え、じゃあ……」

裕司「僕は愛菜の義理の父親なんだ。」

碧「あ、じゃあ大山があたしの過去を知つたのは……」

裕司「僕が教えたんだ……。本当にすまない。」

碧「あ、頭をあげてください……!」

その、責めるわけじゃないんですけど……どうして、教えたんですか?」

裕司「僕の奥さん……愛菜の母は病弱でね、愛菜が10歳の時に亡くなったんだ。」

愛菜には病気のことは話していなくてね。幼かったあの子は状況の整理がつかずに僕が奥さんを殺したと……」

碧「病気だったことは……大きくなってから話さなかったんですか？」

裕司「話したけど……愛菜はお母さんが大好きだったからね、

どうしてもボクを許せなかったんだよ」

碧「……正直あたしには分からないですね。

血が繋がっているといまいと親がいる、それだけの事実があればいいと思うんです

それだけで……十分だと思っんですけどね。」

それ以外は、何もいらない。

元気でいてくれるだけでいい。

裕司「君は……確かご両親を……」

碧「交通事故で……。母はあたしを庇って死にました。

あたしがいなければ助かったかも……」

裕司「でもお母さんは君を守れて良かったと思ってるんじゃないかな」

碧「え……」

裕司「愛する我が子を守れたんだ……って、これは僕の考えだから……え、だ、大丈夫か

い!?

「どこが痛むかい!？」

碧「い、いえ……あたし、家族、との思い出があまり、なくて、…ツ、お父さんがいたらこんな優しい笑顔、

向けてくれたのかな……って…」

裕司「……君はとても家族が好きなんだね…」

碧「裕司さんは、好きですか……?」

裕司「とても可愛い娘だと思っっているよ…けど、これ以上あの子が自ら暗闇に墮ちていくのは見たくない…」

碧「裕司さん、あたしと手を組みませんか?」

裕司「え……?」

碧「あたしは貴方に会うまで大山愛菜を絶望の頂点に立たせることしか考えてませんでした。」

でもあたしは間違ってた。どんなに酷いことされて、頭に血が上つても、こうやって愛する人がいるんだ。

それを壊してしまえば、あたしは今のアイツと同じになる。

だから、気づかせましょう。」

裕司「気づかせる…?」

碧「自分が何をしてるか気づかせるんです。

大山の目を、覚まさせます。」

裕司「……今の僕に、出来るのかな……」

碧「親が子供を愛す力は何よりも最強だと、思いますよ」

裕司「……よろしく頼むよ。」

あたしと裕司さんはしっかりと手を握った。

29話 作戦変更

碧side

その後も裕司さんとは話が弾んでつい色々話してしまった。

裕司さんは今長期休暇中らしい。

いーなー、あたしも学校とか休み……学校？

碧「ア、夕日ガキレー」

(▽、*)ウフフ、……あたしが買い出しに行つたのいつだ？

碧「合宿忘れてたああああ!!裕司さん!!すいませんが帰ります!!」

裕司「あ、僕が送つて行くよ!大人の人に僕から謝るから!」

碧「え、でも大山も……ん、ちよつと待てよ……?……あ。

裕司さん、やっぱ送つてくれますか?そんで、あたしに休暇ください」

裕司「え?」

黒尾side

遅い……!なんだ、事故にでもあつたか……!?

でも勝手に探しに行く訳には行かないし…

いやでも誘拐とかだったら…ッ

影山「碧さん！」

黒尾「お前こんな時間まで何して…誰だその人」

碧「ごめん遅くなって。実はこの人、あたしの新しいお父さんなんだ」

黒尾「は？」

腕を組んで嬉しそうに話す碧。

いや、コイツのこの笑顔…

大山「…ふ、ふざけないでよ！な、なんで碧ちゃんが私のパパといるの!？」

えっ、大山の父親あ!!?

なんで碧と一緒にいんだよ!!?

碧「今までごめんね大山さん。あたしが間違ってたよ。」

大山さんの言う通り事故でお父さんとお母さんを亡くしてあたし、悲しかったの。

皆に囲まれて楽しそうに話す大山さんが羨ましくて…。

でももうあたし悲しくない！恥ずかしい話だけど買い出しの途中で何て馬鹿な事したんだろ、つて

泣いちゃって。そしたら裕司さんが声をかけてくれて……可哀想、なあたしにこう言ってくれたの!

僕が新しいお父さんになってあげるって!

大山「な、によ、それ……!?!」

何よそれ!?!↑

つーかアイツ可哀想って言われたこと根に持つてんな!

裕司「愛菜だつて僕とはいたくないだろうしね……」

大山「ば、パパ……」

碧「なんで裕司さんがそう思うかは心当たりがあるんだね。

じゃあ裕司さんがあたしのお父さんになってもいいでしょ? 裕司さんのこと、嫌いなんでしょ?」

大山「ば、パパは私のよ!!」

碧「勝手に恨んで責めて職権乱用させてるのに何言つてんの?」

それに裕司さんは物じゃないけど?」

大山「こ、こんな事許されると思つてるの……!?!」

碧「思つてるけど?」

大山「い、嫌よ! こんな奴が姉妹になるなんて!」

碧「何言ってるの？w w姉妹になんかならないよ？裕司さんは大山家から出て月城に姓を変えるんだから！」

大山「いい加減にしなさいよ!!」

碧「いい加減にすんのはテメエじゃねえのかよ?」

大山「(ビクッ)」

碧「お母さんが亡くなって頭の整理がつかなかったなんて言い訳でしかねえだろ。

裕司さんのせいじゃないのに責めて責めて責めて責めて！何してえの？お前」

大山の母親が…亡くなってる？

30話 幸せ

黒尾 side

碧「11年前にお母さんが裕司さんと再婚してその次の年に病気で亡くなった！

え、これ裕司さんのせいなわけ？あたしには到底思えないねw」

大山「うるさい!!」

碧「病気で亡くなったのを義理の父親のせいにして今まで過ごしてきたのかよ、滑稽だな」

大山「…つあんたに何が分かるのよ!!!」ガッ!

碧の胸ぐらを掴んで揺らしながら怒鳴る大山。

その顔は怒りと悲しみが混ざったような顔に見えた。

大山「だって仕方ないじゃない!!!突然だったから!!!大好きなママが死んじゃって!

血の繋がりが無い新しいパパと仲良く笑顔で暮らせって言われたって出来

るわけ

ないじゃない!!!8歳だもの!!解決策なんて見いだせないわよ!!!

何も知らないあんたにとやかく言われたくない!!!」

碧「あたしだってそうだよ!!!」

碧も胸ぐらを掴み返して、互いに揺さぶる。

倒れたって関係なしに突き飛ばして、叩いて。

止める奴は誰もいなかった。：止められない、が正しいかもしれない。

碧「何回も！何回も何回も何回も!!!殺そうと思った!!」

事故にあったあの日トラックを運転してた男を!!アイツがお父さんとお母さんを

殺した!!憎かった!!!幸せそうにしてる奴ら皆!!でも!!」

互いに髪が乱れ、ジャージだつて着崩れてる。

何より：互いに苦しそうな顔をしてた。今コイツらは本音で話し合ってるんだと思つた。

思い出したくない辛くて苦しいことを思い出してまで、話してる。

碧「恨んでも仕方ねえだろ!!何も変わらない!!死んだ人間は戻ってこない!!!」

大山「そんなの分かつてるわよ!!!でも止められないんじゃない!!!」

碧「分かつてるよ!!いくら綺麗事言つても気持ち溢れるばつかで嫌になる!!」

でももう一度考えてみるよ!!ホントに憎んでただけかよ!!恨んでただけか!?

大山「楽しそうに笑つて皆に愛されてる奴が憎かつた!!!恨めしかつた!!!」

碧「でもそれと同じくらい強く思ったことがあった!!!血の繋がった家族がない

あたしらは!!憎み!恨み!…羨み憧れた…」

どちらのか分らない沢山の雫が床を濡らした。

大山「なんで私ばかりって思った…:…っ、」

碧「なにも悪いことはしてないのに何でよりによってあたしなんだよって思った…」

大山「血が繋がってなくてもパパは優しかった…」

碧「施設の皆はいつも笑顔で話しかけてくれた…」

大山「それが余計辛かった!」

碧「同情されてるみたいだった!こんな考えになる自分も嫌だった!!」

大山「逃げるようにパパを嫌ってママの事を弱みにした」

碧「逃げるために両親の事を利用して一人暮らしをした」

大山「何もない毎日が楽だった」

碧「あたしらは会った時から同じだったんだよ…、でもそれを認めたくなくて背を向

けた

また逃げた。」

大山「自分が可哀想じゃないって言い張りたくて自分より下に墮とそうとした。」

まるで小さな子供のよう泣く2人を見て、この世はなんて不条理なんだろうと思っ

た。

当時8歳の小さな、これから沢山の幸せがやってくるはずだった子が憎しみ、恨みを持つ。

幸せが当たり前と思う人間、幸せを沢山欲しがる人間、どちらにも当てはまらない、幸せを与えられない人間。俺達がこの2人にかける言葉はない。かけられない。何を言っても、届かない。2人の思っていることは2人にしか分からない。俺達は見守るだけ。

碧「もう一度、やり直してみよう。裕司さんはもちろん、あたしだっているから。」

大山「ごめ、つなさ……ッ、ごめんな、さい……!!」

碧「あたしも、ごめんな、……ッ」

31話 すべき事

及川 side

大山「今まで……ごめんなさい……!!」

碧「あたしも迷惑かけてごめんなさい……」

深く頭を下げて謝る2人。

普通だったら許せないと思うけど今のやり取りを聞いたら何も言えない。

本庄「……悪いことをして謝ることが出来ない人間はクズよ。」

え、急にどうしたの!?!

本庄「でも、謝って変わろうとしてる人を許さない人間はもつとクズよ。

……反省してるなら、それでいいと思う。」

今川「まあ、それを行動に移してもらわなきゃ困るけど……」

……皆優しいなあ。

ま、俺もだけどね!!↑

裕司「愛菜……こんな僕が言うのはアレだけど……愛菜が犯した過ちは

傷害罪に問われるかもしれない。だから……」

碧「裕司さん、傷害罪なんてないですよ。あたしのこの傷は転んだんです」

大山「碧ちゃん…」

碧「今あたしがやろうとしてる事は間違ってる、分かっています。でも！

お願いします…やり直そうとしてる人生を台無しにはしたくないんです

今の時代は警察に行つたというだけであることないこと言われます。

警察に行つて罰を受けることだけが反省じゃない。どうか、お願いします…」

黒尾「お、い…碧…?!？」

碧は手を床につき頭を下げた。

なんでそこまで…。いくら自分と似てるからつて普通ここまでする…？

何が碧を動かしてんの…？

碧「あたしは無意識に大山と自分を重ねてるんです…」

大山の人生は、あたしには他人事と、どうしても思えないんです」

裕司「…頭を上げて。」

顔を上げた碧の表情は酷く怯えてるようだった。

まるで今から自分が捕まるのかと恐れているように。

…：…そうだよな、碧と同じ境遇の人なんて滅多にいない。

まして初めて本音で語り合えた相手なら尚更…。

裕司「……愛菜はどうしたい？」

大山「……っ私のしたことは許されることじゃない。

ここに居る皆が、私を許せないって思うのは当たり前だから……私は警察に行く……」

及川「ちよーつとストップ！勝手に人の気持ち決めないでよね!!」

黒尾「俺らそこまで鬼畜じゃねーしなあ」

本庄「ていうか今さつき許すって言ったじゃない。」

大山「みんな……」

裕司「……愛菜、自分がしたことが許されないと分かっているなら、

これからすべき事は分かるね？」

大山「……っ、はい……!!」

裕司「……じゃあ、僕は先に家に帰ってるよ。残りの合宿、頑張ってるね。」

そう言つて大山のお父さんは帰つていった。

……あれえ？そう言えば……

及川「岩ちゃん、合宿つて後何日だっけ？色々ありすぎて忘れちゃった☆」

岩泉「4日だボゲエ!!」ドガッ

及川「いったあ!!」

3 2話 最強タッグ：!?

黒尾 side

それからの大山の働きは凄かった。

元からある程度のこととは出来るようでそつなく仕事をこなしてる。それで改めて交流を深めるためにマネはローテーションになった。

……が、今日のうちのマネは…

碧「クロ！サボってないで手え動かせバカ!!」

大山「猛虎くん女の子の子に見惚れてる暇あったらスパイク練習!!」

この2人…。碧は言わずもがなスパルタだし、吹っ切れたのか大山だって碧に似てきた…。

つーか段々俺らの扱いが雑になってきた…。

大山「及川!!他校のマネさんにちよつかい出してんじやないわよ!!」

及川「ごめんなさいっ!!てゆーかこの前まで徹呼びだったよね!!?」

大山「面倒臭くなったのよ!!」

オイカー君怒られてやんのww

すると俺の肩にポン、と……ん？

碧「練習に集中出来てないようだねえ？黒尾クン」

黒尾「いやめっちゃ集中してるツスよ碧サン!! さあ研磨! トス上げろ!」

研磨「え、やだ……」

黒尾「何のための合宿だ!! ……あれ、つーかユース組は?」

碧「自分達の練習に力入れるつつつて帰った。

あたしは帰らないけどね」

大山「碧ちゃん! 今日の夕食カレー? 皆飽きてないかな」

碧「あ……じゃあ今から買い出しにでも行くか。」

黒尾「精が出ますねエ」(ニヤニヤ)

大山「碧ちゃん、私この人好きじゃないわ」

黒尾「そんな冷めた目で言わないでクダサイ!! 傷つく!!」

碧 side

傷ついているクロはほつといて大山と買い出しに行く。

予算……1万。

碧「いや何も買えねー!!」

大山「これで30人越えのご飯作れって言われても…。」

碧「……大山、いくら持つてる」

大山「……2万。碧ちゃんは」

碧「……3万。合わせて6万か……ギリいけるな。」

あたし達がやろうとしてること……そう、自腹。

絶対後で請求してやるかな…っ!!

碧「何作るか？」

大山「カレーみたく一気に作れちゃうのがいいよね」

碧「ん……肉じゃがとか？」

大山「いいね和食！私も作れるから大丈夫！」

碧「じゃあ材料持つてこようぜ」

大山「オツケー！」

10分程度で材料を集めて会計をすませる。

残ったのは3万…。

碧「なんか買おうぜ。あたし最近夜中に腹減るんだよ」

大山「あ、じゃあポトフとかどう？」

碧「あー、いいな。肉じゃがの材料で代用も出来るし。じゃあコンソメとか買う

かー。」

暑い中買ひ物袋を持って合宿所まで歩く。

あいつら練習ちゃんとやっつけてかなー…

てか今日主将会議だよね。マネ行くのか？

「ねーねー君たち可愛いねー！」

「俺らと遊び行かない〜？」

碧「(半袖短パンで歩いてる女に可愛いって目え腐ってんじやねえの?)」↑

大山「(碧ちゃん、めっ!)」↑

「なんで黙ってんの、ほら、行こうよ！」

そう言つて肩を抱いてくるモブA↑

うげえ…気持ち悪ッ

でも絶対しつこいタイプだしな〜

碧「(ピコーン)今ちよつと急いでるから電話番号教えるねえ？」

大山「え、碧ちゃん!？」

「まじで!?!じゃあ後で電話するわ!」

碧「はーい♡」

そして去つてくモブAとB。

ダルかったー。こういうナンパってマジでサムいわ。自分で気づいてねーのか？
大山「いいの？教えちやって。」

碧「何の問題もない。あたしには一切支障は出ないから♪」

『「あ！やつほー！これからラブホでも行くこーよ！」』

黒尾「(ソワアツ) 誰が野郎と行くかよ気色悪イ!!!」プチイッ！↑電話切る音

碧「ぎやははははははははははは!!!」ゴロゴロゴロ↑笑い転げてる

黒尾「テメエか碧オ!!!」